

恋愛台風2

S u z u e T a k e o

十和田 眞

Makoto Towada

eternity



エタニティ文庫

目次

情熱の片鱗

5

巣立ち歌は鳴き声と共に

95

情熱の片鱗

1

彼が歩けば人が振り向く。

白磁はくじのようになめらかな肌、微笑をたたえる薄紅色の唇。

色素が薄い髪は男にしては長く、彼の歩調と共にふわりと揺れて、その柔らかさと繊細さを示す。

一見華奢かしゃにも見える体躯だが、顎あごを引き、背を伸ばす彼を正面にすれば、例えようのない威圧感に体を小さくするのは彼の前に立った者の方だろう。

彼に好意を寄せる人間は数多星の数、泣いた女は塵の数。まるで陽炎かげろうのように彼は人の心を弄ぶ。その実体に触れることができる人間の名前を数えれば、片手で足りる。

五本の指の中に含まれる人間の一人、本村武雄は彼の横顔を眺めながらそんなことを思った。

彼の顔には笑みが浮かび、対する自分は苦虫を噛み潰したように渋い顔をしている。「そんな顔をして、どうされたんですか？」

本村が考えていることなんて手に取るようにわかっているだろうに楽しんで尋ねてきた彼に、本村は嘆息して、言っても無駄なことは承知の上で、「やりすぎじゃありませんか？」と諫めるように言う。

「何がですか？」

「『試験』ですよ……。芽が出そうな社員を見つかるたびに無理難題をふっかけて潰してしまっつては周防部長に怒られますよ」

「この程度のこと、耐えてこそでしょう？ これしきのことです潰れる方が悪いんですよ。ああ、まったくもってつまらない。僕は悲しいです」

彼は自分の方が被害者だとしても言わんばかりの態度で瞳まっげを伏せる。そうかと思えばパツと顔を上げ、「そういえば」と言いながら、スーツの内ポケットから一枚のメモ用紙を取り出した。

「本村主任。これ、頼まれていたものですよ」

「あ、ああ、すみません……」

「いいえ」

確認すると、数日前、本村が彼に質問していたことへの答えが書かれている。このタイミングで出してくるのがあざといと思いつながら、歩き出した彼に付き従うように自分も足を踏み出した。

「それにしても……」

彼は、人差し指を唇に押し当てながらこちらを振り返る。

「最近、彼女さんに付きつきりじゃないですか。飲みに付き合ってくれないから寂しいなあ」

「そんなつもりはないんですけど」

「無自覚なら考えを改めた方がいいですよ。ものすごい勢いでのめり込んでいるじゃないですか。あの人間嫌いの本村主任が、ね。そんなにいいですか、彼女さんは」

「……」

「都合が悪くなると、すーぐ黙る」

彼はクスクスと笑いながら足を止める。同じく立ち止まった本村を彼はじつと見つめてから、「ま、いいですけどね」と話を打ち切るように言い、

「じゃあ、僕、ちょっと用事があるので、本村主任は先に人事部に戻っててください」と人事部の方向を指さした。

「何かあったんですか？」

「周防部長に呼び出されました」

「ほら見たことですか」

だからやめると言ったじゃないですかと表情を険しくした本村に、彼は「聞こえない」

い」と耳を塞ぎながら歩き出す。そんな彼の背中を眺めて深い溜息をつき、本村は人事部へと戻っていった。

そして、その本村の背中を、今度は彼が——、本村の直属の上司で「人事部の麗人」と呼ばれている佐藤大輔さとうだいすけが見つめる。

「原田鈴……ね」

2

「お買い物終わりー。重かったー」

手製のエコバッグに食材をぎっしり詰めてようやく家に辿り着いた鈴は、前のめりになりながら荷物をテーブルの上に置いた。どう見ても、独身女性一人分の量ではない。それもそのはず、これには、鈴だけではなく恋人である本村の分も含まれている。

同じ会社に勤める本村と付き合い出してから、もうすぐ半年が経つ。

今まで付き合ってきた男たちとは、長くもっても三、四ヶ月、酷いときには数日で別れていた鈴が、本村とは半年、しかも、良好な関係のままで付き合えている。これは鈴にとって奇跡に近い。

友人の惚気話のろけばなしを聞いたたびに別世界のことのようだと思っていたけれど、今の自分は誰よりもたくさんの惚気話のろけばなしができるだろう。実際はそんなこと、気恥ずかしくてできないが、それくらい本村のことばかり考えている。

最近嬉しいのは本村の世話が焼けるようになったことだ。しつかり者で細やかな配慮を見せる本村だが、思いの外ほか、不摂生な生活を送っている。

特に乱れているのが食生活。以前から、物が少ない本村の部屋以上に冷蔵庫の中がすっきりしているとは思っていたのだが、彼は食事を抜いたり、外食が多かったりと、偏かたよった食生活を続けてきたようだ。

「料理嫌いですか？」の問いかけに本村は困ったように笑って、「作るのが面倒くさくて」と言った。

本村のような人にも苦手なものがあるのかと思うと同時に嬉しくなったのは、自分が本村のためにできることを見つけたから。

それからというもの、多めに食事を作っては本村に差し入れをしている。毎日だと本村が気を使いそうなので週に一、二度しかしていないが、バランスがとれたものを食べてほしいし、「美味しい」と言ってもらえるのが嬉しかった。

(本村さんと付き合ってもうすぐ半年か……)

食材をキッチンに運び、料理の準備をしながら鈴は本村の姿を思い浮かべる。

何かお祝いでもしようかと考えて、あることに気付き、ブンブンと首を振った。

鈴は不器用な性格で一度にたくさんのことができない。その上、集中すると周りが見えなくなるところがある。その性格が仇あだになり、先月開いたハロウィンパーティーでは痛い目に遭った。パーティーを大がかりにしすぎたせいで準備に手こずり、本村と一緒にいる時間が確保できなかつたのだ。

だが、「付き合って半年」というものは鈴にとっては特別な輝きを持っている。

少し豪華な食事を作るくらいならできるだろうかと考えて、キッチンの壁にかけてあるカレンダーに視線を向けた。

来週の土曜日がちょうど付き合って半年だ。週末は金曜から日曜まで本村の家で過ごすことが増えたので難しそうだが、木曜の夜あたりに料理を仕込めば何とかなるかもしれない。

しかし、付き合って一年ならまだしも半年ごとにお祝いをしていたら呆れられないだろうか。

(本村さんには話さずに、一人で祝おう)

ご馳走を用意して「どうしたの？」と聞かれても「気が向いたんです」で通せば問題ないだろう。自分一人の半年お祝い。鈴は笑顔で拳こぶしを握る。

だが、そんな計画はあつという間に狂わされることになった。

「原田さん、来週の木曜、仕事終わったら映画観に行かない？」

「ら、来週の木曜日ですか！」

タッパーに詰め込んだ料理を渡し、いつものように抱き合ったあと、余韻に身を浸しながらベッドの中で肌を寄せ合っていると、本村が思い出したようにそんなことを言った。

「原田さんが観たいって言ってた恋愛映画、あれ来週の木曜で終わるみたいなんだよね。仕事終わったら行こうよ」

鈴は映画を観るのが好きで、月に何度か本村と映画館に足を運んでいる。

本村が言う恋愛映画とは、以前鈴が予告編を見て、「面白そうですね」と呟いた作品だろう。何気ない一言を彼はしっかりと覚えていたようだ。

もちろん見たいと思っていたし行く気は満々なのだが、その日に半年記念の食事を準備しようと思っていた鈴にとっては大きな誤算だった。

だったら前倒しにして水曜日に準備しようかと考えて、その日は外回りがあることを思い出す。外回りがある日はデータ作成や仕事の評価考察をしなければならないので料理をする暇はないだろう。

そうかといって火曜日から準備するととなると、日持ちするものを作らなければいけな

いので料理が限られてくる。

「何か用事があった？」

一人考え込んでいると本村が尋ねてきたので、鈴は慌てて「いいえ！」と声を上げた。

「行きます、行きます、行きたいです！」

「なーんか怪しいなあ……。原田さんがそういう態度を取るときは必ず何かあるんだよね……。ねー……」

鈴の肩下まで伸びた髪を弄りながら本村が疑わしげな瞳でこちらを見てくる。凶星をさされてぎくりとしたがバレるわけにはいかない。仕方がないので来週に予定していた半年記念のお祝いを再来週にずらすことにして、「何でもありませんよー」と繰り返した。「そういえばだいたいぶ紅葉も色づいてきたらしいね。土曜は紅葉狩りにでも行く？」

本村が別の話題を振ってくる。季節はもう十一月。紅葉が綺麗になってきたと数日前のニュースでも言っていた。

「紅葉狩りですか？」

「鎌倉あたりで。どう？」

「いいですね！」

今まで付き合ってきた彼氏たちには競馬や競艇、酷いときにはキャバレーにまで連れいかれ、しまいには代金を払わされた鈴だ。本村とのデートが楽しくないはずがない。

「楽しみにしてます」

本村の胸に頬を寄せて呟けば鈴の額に本村の柔らかな口づけが落ちる。幸せだと思える瞬間だ。

3

翌週の土曜日、本村と鎌倉に出かける日。鈴は朝から弁当作りで大忙しだった。それというのも今日が付き合ってからちょうど半年目。お祝いは一週間ずらすつもりだったが、やはり当日にする方がいいと思ひ直し、今は必死で弁当を作っている。

おにぎりにサンドイッチ、唐揚げに卵焼きと、どうしても定番メニューになってしまいが、彩りに気を配り綺麗にバスケットの中に詰め込んでいけば、なかなか豪華な弁当に仕上がった。

改めて見ると運動会でよくありそうな弁当だ。そこでふっと昔の記憶が蘇る。

鈴の家は母子家庭で、母親は朝から晩まで休む暇なく働いていた。そのせいで学校行事に参加できないことも多く、用意されるのは一人分の小さなお弁当。いつもどこかで誰かと一緒に食べる大きなお弁当に憧れを感じていた。それがこの年になって叶うとは。

人生何が起こるかわからない。

感慨深く昔のことを思い出していたが、本村との約束の時間は刻々と迫っている。弁当の準備はできていても鈴本人の準備はまだまだだ。鈴は慌ててシャワーを浴びて予め決めておいた服に手早く着替えた。

少し肌寒くなってきたのでワンピースの上にロングカーディガンを羽織る。だいぶ伸びた髪は普段アップにしていることが多いが、服に合わせて今日は下ろした。癬毛なので手入れが大変だが、本村がよく髪を撫でてくれるので、トリートメントやヘアアイロンを駆使して何とか手触りのいい髪を維持している。

鏡の前で一旦服装を確認してから鈴は大事にしまっていたビーズアクセサリーを取り出した。これは以前、本村が鈴のためにわざわざ作ってくれた物だ。可愛いデザインで鈴のお気に入り。何より、彼が作ってくれた物だと思ふと輝きが増す。

本村の家に泊まることになるだろうからと着替えも用意すると、どこに旅行に行くのだと言われても仕方のない荷物量になった。

時計を見れば九時過ぎ。本村との約束は十時だ。鈴はまだ化粧をしていないのにバッグに入れ込んでしまった化粧ポーチを慌てて取り出す。化粧をしながらテレビをつけて天気を確認すると今日は快晴、お出かけ日和だ。それでも冷え込んだら困るとバッグにストールも入れる。何かにつけて慌たらしい。

そうこうしているうちに携帯が鳴った。相手はもちろん本村だ。

『もうすぐ到着するから』

鈴はテレビを消して荷物を抱える。家を出て、ゆっくりと歩きながら、弁当もある、着替えもあると一つずつ確認していくと、化粧ポーチをテーブルの上に出しっぱなしにしていたことに気が付いた。再び家に戻り、化粧ポーチを鞆の中に詰め込んで、早足でマンションの廊下を進む。

もう来ているのではないかとエレベーターの中で心配していたが、マンションから出たところでちょうど本村の車が見えてきた。中から本村がこちらに向かって軽く手を上げる。鈴も応えるように手を振って助手席に乗り込んだ。

「おはよう。荷物多いね、後ろに載せようか？」

「膝の上に置くので大丈夫ですよ」

シートベルトを締めながら彼の方を向くと、本村の視線が鈴の胸元に行く。そこには彼が作ったアクセサリー。

「使ってくれてるんだね」

本当は毎日でも使いたいけれど、なんだか勿体ない気がして、遠出するときや特別な日にだけつけていた。そのたびに本村が嬉しそうな表情を浮かべるので自分も嬉しい。

「今日の服も可愛いね。髪下ろしてるのも似合ってる」

そつなく彼の口から零れた言葉に、鈴は膝の上に載せた荷物を抱えながら照れる。

「そんなこと言われたら本村さんに抱きつきたくありませんよ」

「俺こそそんなこと言われたらいけないところに連れ込みそうになるんだけど」

「どこですか？」

「……どこだろうね」

乾いた声で笑った本村に首を傾げながらも、

「本村さんと一緒だったらどこでも行きますよ？」

とにつこり笑えば、「今日は鎌倉」とまるで自分に言い聞かせるように本村が言った。

首都高を通過して横浜まで行き、そこから一般道を走って二時間強。重要文化財が多く残る鎌倉に辿り着いた鈴は、車を出るなり色鮮やかな紅葉に歓声を上げた。

「圧巻ですね……！」

紅葉は風に吹かれて葉の雨を降らせている。鈴の肩にも紅葉が落ちて、本村が笑いながら摘み上げた。

「京都の紅葉も綺麗だけどね。鎌倉も趣があるよ」

まずは散策、と弁当の入ったバスケットを片手に歩き出そうとした鈴だったが、そんな鈴の手から本村がスツと荷物を取る。

「本村さん？」

「持つよ」

決してキザっぽくない仕草に鈴は小さく笑って、

「じゃあ私は本村さんの手を引きます」

と手を伸ばした。

「それは是非」

本村がその手を取り、指を絡ませる。大きな手は鈴の手よりも冷たいけれど全然気にならない。

上を向けば紅葉のアーチ。真つ青な空に赤い紅葉が映えている。参道に落ちた紅葉もモザイク画のように美しい。積み重ねてきた年月の賜物か、なまもの重厚な雰囲気かまを醸し出す神社もこの景色をいつそう輝かせていた。

「ところで……これ、何が入ってるの？」

そう本村が尋ねてきたのは参道を半ばまで歩いた頃だ。そういえばバスケットの中身を教えてなかった

「お弁当です」

心の中で、「半年記念です」とこっそり付け加える。

「作ってきたの？」

「はい！」

「いいね、お弁当」

彼は興味深げにバスケットを見つめている。時間を確認するともう十二時。ちょうどお腹もすいてきた。本村も同じなのだろうか、顔を上げ、場所を探すように周囲を見渡している。

「確か休憩所があったよ。そこで食べようか」

この場所に何度か足を運んだことがあるらしい本村が参道から脇道に入っていた。こんな綺麗な景色を眺めながら食べる弁当はきつと美味しく感じるに違いない。

「あ、あれですかね」

三分と経たないうちに目に入ったのは紅葉の中、静かに佇む休憩所だった。屋根は立派な日本瓦。しかし、外の景色が見えやすいようにと四方がガラスで覆われていて、中にはすでに観光客が数名くつろいでいた。

「窮屈そうだね」

中の様子を窺いながら呟いた本村。鈴は頷きながら視線を泳がす。すると、休憩所の傍に木のベンチが置いてあった。四人は腰かけられそうなベンチだ。

「本村さん、そこでご飯食べませんか？」

ベンチを指させれば本村は「寒くない？」と尋ねてくる。本村と手を繋いでいたせいか

気付かなかったが、太陽が皆さんと輝いているわりにどうも肌寒い。それでも、心配するほどではなさそうだ。

「平気です。本村さんは寒いですか？」

「俺も平気。じゃあ、ここにしようか。紅葉もよく見えるし」

先にベンチの上を陣取っていた紅葉を軽く払うと二人は腰かけた。ここは紅葉が近いうちに木の香りがして心地よい。鈴は景色に満足しながら本村からバスケットを受け取った。それを二人の間に置いて置く。弁当のお披露目に本村が「わ、すごいな」と声を上げた。

中身は片寄ったりすることもなく、朝、綺麗に詰め込んだままだ。車内で膝の上に置いて良かったと思うと同時に、丁寧に扱ってくれた本村にも感謝した。

「弁当って初めてだよ。豪華だし、だいぶ頑張ったんじゃないの？ いつも以上に力が入ってるよ」

ありきたりなおかずばかりなのに、ちゃんと気合いを入れて作ったのが本村にはわかるのだろうか。鈴は用意していた割り箸と紙皿を本村に手渡ししながら、「さ、気が向いたので……」と答える。少し声の上擦った。

本村は鈴の変化に気付かないのか弁当を上げしげと眺めている。意識がこちらに向いていないことに安堵しながら鈴はバッグから小さめの魔法瓶を取り出した。しかし、バッ

グの中から突然にゆつと出てきたそれに本村は驚いたようで、こちらを向く。

そんな風に驚くとは思わなかった鈴は、魔法瓶を置いたあと、本村の視線が弁当に戻るのを待った。視線が弁当に戻った瞬間、鈴はもう一つ魔法瓶を取り出す。

「……何で二つもあるの？」

しかし残念、本村はしっかりと鈴の様子を見ていたらしい。

「え、あ、その……」

反射的に背後に隠そうとした魔法瓶を本村の手が追ってくる。その瞬間、本村の顔が近くなって、動揺に強張った手から魔法瓶がずり落ちた。

「ほら、隠すから」

彼は笑いながら紅葉の上に落ちた魔法瓶を拾い上げる。「はい」とこちらに手渡す姿に鈴は改めて見入った。

「……どうしたの？」

動かない鈴に本村が不思議そうに尋ねてくる。弾かれたように魔法瓶を受け取って、そのままわたわたとしていたのだが本村は不審顔だ。黙っているのもおかしいかと思いついて、鈴は魔法瓶を一旦ベンチの上に置くと、

「最近ドキドキするんです」

と呟いた。

「ドキドキ?」

本村が口にするのは似合わない単語なので少し笑う。目を見て話すのはどうにも照れてしまい、再び魔法瓶に手を伸ばし紙コップに中身を注ぎながら続けた。

「本村さんのちょっとした動作とか、言葉とか、そんなのにすごくドキドキするんです。今も本村さんの顔が近づいただけでドキドキしました」

ふわりと上がった湯気、美味しそうな香り。紙コップから手の平に熱が伝わる。ちょっと熱いくらいだ。今の自分みたいに。

「大の大人が何言ってるんだーって感じですよ。はいどうぞ。これ、コーンスープです。あともう一個の魔法瓶に温かいお茶が……」

鈴は誤魔化すようにそう付け加えて顔を上げた。するとそこには啞然とした表情を浮かべる本村の姿。彼は鈴の視線に気付くと我に返ったように口を押さえて顔をそらした。

「本村さん?」

「ご、ごめん、ちょっと待って」

表情を窺えば本村の顔が反対側に逃げる。さらに追うと、また、鈴から逃げるように顔をそらした。

「な、何で逃げるんですか?」

変なことを言っただろうかとコーンスープ入りの紙コップを置いて本村のジャケット

を掴んだが、本村はなかなかこちらを向こうとしない。

「本村さん、本村さん?」

「待って、待って、ちょっと待って」

食いさがる鈴に本村は眼鏡を上げるとようやくこちらを見た。彼は大きく息を吐いて、眼鏡を弄りながら、

「俺も大の男が何やってるんだって言われても仕方ないなあ」

と呟いた。

「本村さん? どういうことですか?」

「……ドキドキしてもいいんじゃないかな、ってことだよ。えっと、それよりお茶もあるんだよね、はい、紙コップ。ほら、用意しよう」

せつつく本村に押されるように、鈴は紙コップを受け取りお茶を注ぐ。

「お腹すいたなー」

そう言われたときには、本村の不審な行動なんか頭から吹っ飛んでいて、箸を片手に、

「本村さん、何が食べたいですか?」と問いかけていた。単純にできている。

「卵焼き」

「はい」

言われるままに卵焼きを取って本村の紙皿に載せる。他にもおにぎりやおかずを綺麗

に並べて、ようやく準備が整った二人は手を合わせた。まずは最初にリクエストした卵焼きを本村が口に運ぶ。緊張する一瞬だ。

「さすが。美味しいよ」

「味付けとか大丈夫ですか？ 卵焼きって家庭によって味付け違うって言うから。ちょっと甘いですかね」

「いや、大丈夫」

返ってきた反応に鈴もほっとしてサンドイッチを手に取る。

本村は唐揚げを摘み上げながら、

「何より、原田さんの料理、好きだし」

と、微笑んだ。

言われた「好き」の一言にまた鈴は動揺した。ベッドの中での甘い響きとはまた違って、何気なく零された一言が鈴の心をくすぐる。そして、くすぐられすぎたのか心ここにあらずの鈴は今まさに食べようとしていたサンドイッチを落とした。

「……きゃあ！」

「だ、大丈夫？」

幸いサンドイッチは紙皿の上。お互い顔を見合わせ一安心。

「……原田さんよく物落とすよねー……」

「ううう……」

「サンドイッチに魔法瓶に……それこそ半年前には、コピーの原本も落としたし書類も落としてた」

何気なく出てきた「半年」の言葉。

「……よ、よく覚えてますね。半年前のことなのに……」

「あれをきつかけに話しかけることができたから、覚えているさ、そりゃ」

思い出すように目を細めて笑う本村。鈴は、「今日がちょうど半年目の日なんですよ」と心の中で呟いた。

お祝いだって本当はこんな弁当では足りないくらいだ。

自分には勿体ない人。だけど、勿体ないからと言って諦めることも手放すことも、もうできない。

手にしているお茶の湯気が目に染みたのか、ほんの少しだけ視界がぼやけた。

多めに作った弁当は本村のおかげで綺麗に片付いた。車の中にバスケットと魔法瓶二つを置いて身軽になった鈴は、本村と一緒に周辺の神社を巡る。

紅葉だけではなく黄金の葉を揺らすイチョウに、帽子を被った可愛い実を落とす椎の木など、鎌倉には秋を感じさせるものがいくらかでも溢れていた。

テレビで繰り返される「秋」の言葉に何となく秋を感じていたけれど、今日こうやっ

てゆっくり景色を見ることでしっかりと季節を体感する。

(……あれ……?)

しかし、そんな穏やかな静けさを急に緊張に変えたのは本村の熱い眼差しだった。そびえ立つイチヨウの大樹を見上げていた鈴がふと視界に本村を捉えれば、彼は情熱的な眼差しで自分を見ている。それは彼がベッドで理性を手放したときに見せる表情によく似ていた。太陽の下では見てはいけないものを見てしまったような気がして、再びイチヨウを見上げながら、胸元でぎゅっと手を握りしめる。

まさか体を求められているのだろうか。それにしても色情は見受けられないが。

今度はこっそりと彼の表情を窺った。本村は確かに自分を見ているのに、何故か視線が合わない。彼はこの空間に鈴を縫い止めて、一つの景色を眺めているようだった。少なくとも劣情を胸に抱き鈴を求めているわけではなさそうだ。だって情熱的なのに、少年のような純粋さを感じるから。一体、この眼差しの意味は何なのだろう。

「……あ、ごめん」

自分の不自然な態度に気が付いたのか、ふいに本村が言葉を発した。笑顔を作り歩み寄ってくる本村をじっと見つめる。いつもと何ら変わらない表情、しかし鈴の頭から先ほどの眼差しが消えない。

結局、その正体を知ることができないまま、鈴は本村に手を引かれイチヨウの木から

離れていった。

ゆっくりと流れる時間と紅葉を満喫し、気付けば夕暮れ時。

駐車場に戻り、車に乗る。走り出した車の中で鈴は、

「すっごく綺麗でした。鎌倉ってこんなにいい場所なんですわね！」

と感想を伝えた。

「喜んでくれたなら良かった」

こちらに視線を向けた本村はやはりいつもどおりで、あの眼差しは見間違いだつたのかもしれないと考え直していると、車が海沿いに出た。

「きれい……」

海に引き寄せられる夕日が波の上に赤い光の道を作っている。夕暮れは山の陰影を濃くして、夜を誘うようだ。

「七里ヶ浜だよ。下りてみる?」

本村の言葉に頷いて海沿いに車を止めると二人で砂浜に下りた。砂に足を取られる鈴を本村が支えてくれて苦戦しながらも波打ち際に辿り着く。

湿った砂地に残る足跡、夕日に照らされ伸びる影法師。悪戯に足をすくおうとする波から逃れて、その波音に耳を澄ます。まるで吸い込まれてしまいそうな景色だ。

しかし、鈴はブルリと体を震わせて、自分の腕をさすった。

(ちよっとだけ……、ううん、すっごく寒い……っ)

潮風は予想以上に強く鈴に打ち付け、鳥肌が立ってムードが台なしだ。そこでバッグにストールを入れていたことを思い出す。

「本村さん、ちよっと車のキーを貸してもらってもいいですか？」

「いいけど……どうしたの？」

「ちよっと風が……ひやつ」

寒さを堪えるために強張らせていた体が会話することで緩んでしまったのだろう、か、吹いた風に鈴は声を上げる。悲鳴に本村は「ああ」と風が吹いた方を眺めてから、躊躇なく自分のジャケットを脱いで鈴にかけた。ふわりと包み込んでくれる温もりに本村の腕の中を思い出す。

「それ結構温かいだろ？」

ここが砂浜なのもどかしい。二人きりだったらその広い胸に抱きついたらだろうに。

しかしそこで本村の服装に気が付き、鈴はハッとした。ジャケットに隠れていてわからなかったが、本村が着ているのは七分丈のTシャツ。鈴以上に薄着じゃないか。厚手のジャケットのおかげで寒くなかったのだらうが、鈴に渡してしまった今、吹きすさぶ潮風に熱を奪われているはず。

「本村さん、やっぱり鍵貸してください！」

「え、あ、うん」

ポケットの中からキーを取り出して鈴に手渡す本村。

「ちよっと待っててくださいね！」

「原田さん？」

「待っててください、すぐ戻ります！」

鈴は車のキーを握りしめて、砂浜を駆け出した。ひしめく砂たちに足を取られ、思わず転びかけたが何とかセーフ。見ている本村は気が気じゃないようで、今にもこちらに駆け寄ってきそうだ。

「大丈夫です！」

鈴は車に到着するとバッグの中からストールを引っ張り出す。それを胸に抱えると波打ち際に待つ彼のもとに駆け戻った。そして、ぐっと背伸びをすると、少しだけ温まったストールを本村の肩にかける。

「これ……」

「結構厚手だから大丈夫かなと！」

これなら本村も寒くないはずだ。満足げに頷いた鈴を見て、本村は風に飛ばされそうなストールを押さええながら笑い出した。

「どうしたんですか？」

「ジャケット貸した意味がないじゃないか」

くく、と笑いを嘯み殺して本村が言う。車に戻る手間を省くためにジャケットをかけたのだから、鈴の行動が滅茶苦茶に見えたのだろう。

「ありますよ！ 二人揃って温かくなりましたもん！」

「ああ、そうだね。うん、そうだ、そのとおりだ」

鈴がムキになって言いつのると本村はあっさり白旗を揚げた。二人で笑い合って、鈴はまた波打ち際に足を進める。

空はさつきよりも夕日の色が濃くなり、海にできた赤い光の道もくつきりしてきた。

冷たい潮風が鈴の髪を揺らす。本村のジャケットが守ってくれるおかげで寒くない。

鈴は振り返ると少し離れた場所で見えていた本村を呼ぼうとした。そこで気が付く。本村が怖いほど真剣な眼差しで鈴を見つめていることに。

イチヨウの大樹の前でも見せた、正体不明の熱い眼差しだ。

彼は真剣な眼差しのまま近づいてくると急に鈴の手を取る。何かと思えば、

「原田さん、写真、撮ってもいい？」

と、まるでものすごく重大なことかのように言った。

写真くらいなんてことはないのに、どうしてこんなに真剣な顔で言ってきたのだろう。理由はわからないが、勢いと雰囲気呑まれて頷く。

「ありがとう、ちよつと待ってて！」

許可が下りるや否や、本村が車に向かって走り出した。しかし、すぐに立ち止まって「ゴメン、鍵！」と叫ぶ。普段冷静な本村らしくらず、随分慌てているようだ。

それから五分後、車から戻ってきた本村の手には一台のカメラがあった。取り扱いは簡単なコンパクトサイズのデジカメが主流の中、本村が手にしているのはフィルム使用のかなり年季が入ったカメラだ。

「波打ち際を歩いてもらってもいいかな？ 普通にしてくれたらいいから……」

本村の言葉に頷いて、鈴はゆつくりと歩き出す。どうせなら可愛く写りたいが、意識すればするほど顔が強張るので、本村が言うように普通にしておくのが一番だろう。

彼はなかなかシャッターを押そうとはしない。まるで、いつ来るともしれない特別な瞬間を待っているように思えた。あの、情熱的な眼差しのまま。

穏やかに笑っている本村も好きだが、真剣な表情の本村も格好いい。

風が流れる、髪が揺れる。触れ合えるほど近い距離にはいないけれど、彼の眼差しは自分の心を抱きしめている。そう思うと、自然と笑みが浮かんだ。だから、彼に向かって笑いかける。満面の笑みで。

するとその瞬間、カシャ、とシャッターを切る音が聞こえた。写真が撮れたようだ。本村はゆつくりと腕を下ろし、年季の入ったカメラを見つめている。

「……本村さん？」

驚かさないうちに聞こえるか聞こえないかの声で彼を呼ぶと、

「……もうちよつとだけ、いい？」

と、本村がカメラを構え直した。

自分の影を追って足を踏み出す。ロングカーデイガンの裾が動きに合わせて緩やかに揺れる。その姿を逃さないようにシャッターを切る本村は無言だった。鈴も彼が望むまま風景の一部になる。

(本村さん、きつと写真撮るの大好きなんだな)

半年目にしてまた新しい本村を知ることができたと思いつながら眺めた夕日。

シャッターを切る音が聞こえた。

沈みかけていた夕日は完全に海に呑み込まれ、空には星が瞬く。一体どれだけ写真を撮ったかわからなくなった頃、本村がふいに顔を手で押さえた。いつもの雰囲気に戻ったような気がして彼を見つめると、本村が「ゴメン」と謝ってくる。

「入りこんでた、ゴメン」

鈴をほったらかしにしたことを詫びるように彼が謝罪するので鈴は首を左右に振った。大体、鈴も「写真を撮る本村さんも格好いいなあ」と思いつながら見ていたので、彼が謝

るなら自分も「不純な心持ちの被写体でした」と謝るべきだろう。

ただ、そうなると謝罪合戦になってしまう。

「美人に写ったでしようか」

ふざけるように言いながら鈴は本村に手を伸ばした。彼は虚をつかれたように目を丸くして、すぐに破顔する。表情には安堵があった。本村はカメラを首から下げて鈴の手を取る。いつも少し冷たい本村の手が、こんな潮風の中なのに、不思議と温かい。

「手が冷えたね」

本村は鈴の手の冷たさに驚いたようだ。彼は口元に鈴の手を引き寄せるとふーっと息を吹きかける。鈴の表情が緩んだところでそのまま本村が手の甲に唇を押し当てた。日は暮れたが海にまだチラホラと人がいる。人前ではこんなことをしない人なのに。本村の行動に、冷えていた鈴の手は、指の先、それこそ爪の先端まで血が通っていくようだった。

「戻ろうか」

鈴の肩を抱くといつともより早足で本村は車へと向かっていく。海は白波を立てて何食わぬ顔で自分たちを見送っていた。

車に戻ると本村はカメラをしまい、運転席に座る。もうすでに助手席に腰かけていた鈴は本村にジャケットを返した。鈴の体にはストールが返ってくる。そのまま、自分の

体をくるんでいると本村がこちらに体を傾けた。

「原田さん、キスしていい?」

「はいっ?」

あまりにも唐突だったので驚いていると、本村が「ダメ?」と窺ってくる。鈴は首を振った。「いいですよ」という意思表示だ。

すると、そんな鈴の顔を固定するように彼の左手が鈴の頬へ、もう片方の手は後頭部へと回る。

軽いキスだろうと思っていたがどうやら違うようだ。鈴の動揺など無視するように本村の顔が近づく。鈴はぎゅっと目を閉じて、本村の眼鏡にあたらぬように顔を傾けた。押し当てられた温かい唇。推測どおり、彼の舌が忍び込んでくる。

濃厚なキスの中、後頭部を押さえていた本村の大きな手が鈴の腹に触れた。それが何度もさするように動いて、指先が鈴の胸の膨らみに達したところで本村が鈴から離れる。

「ベッドに行きたいです……」

零れた本音に本村が苦笑した。

「原田さん、やつとかき集めた理性が逃げていつちやうから」

彼も気持ちは一緒。いや、鈴以上に強いかもしれない。もう一度だけ軽くキスをして、本村はライトを点けると車を出した。

見通しのいい道路、淡々と景色が流れていく。単調な風景の繰り返しと車の揺れが心地よくて、ぼんやりする中、早く二人きりになりたいと思いつつ、鈴は知らぬうちに目を閉じていた。

4

「原田さん、原田さん」

気が付いたのは自分を呼ぶ声が聞こえたから。鈴は「ん……」とみじろぎ、うつすらと目を開ける。目を擦り顔を上げればこちらを窺う視線と鉢合わせた。

「本村さん……」

「ゴメン、起こして」

「いえ……っ! 私、寝ちゃってましたか?」

体の上には本村のジャケットがかけてあり、座席も少しだけ後ろに倒されていた。本村が気を配ってくれたのだろう。

「すみません、運転任せて寝ちゃうなんて」

彼のジャケットを握りしめながら頭を下げると「それは大丈夫」といつもの調子で本

村が言う。もう一度「すみません」と言ってから鈴は窓の外を見た。

景色を確認すれば、見知らぬ大きな建物。鈴の家でも本村の家でもない。

「……ラブホですか？」

「はっ？　ちが……っ！　違う違う！」

我慢できなかったのだらうかと尋ねた言葉に車を降りようとしていた彼が慌てて声を張り上げた。

確かにラブホのような毒々しいネオンは見あたらず、シックなレンガ色の外観は上品だ。

「でもまあ、近いといえば近いかな……」

首のあたりを搔いて本村は後部座席から荷物を取り出す。

「原田さん、着替えとかはいつものバッグ？」

「あ、はい、そうですけど……本村さん、ここ……？」

「さ、おいで」

誘導するように歩き出した本村、そのあとに鈴も続く。駐車場を抜けて建物にそってぐるりと回り、鈴はようやくこれが何なのか理解した。

「普通のホテル、ですか！」

「普通って。うん、まあ、そうなのかな」

見れば静かで香り深い森林に囲まれた六階建ての立派なホテル。中から柔らかな光が零れ出し、鈴の足元に影を作った。

「でもどうして」

何故自分がここにいるのかさえ呑み込めない。

本村は笑いながら、

「とりあえずチェックインしようか」

と足を進めた。

「こちらが『風月の間』になります」

チェックインを済ませ仲居に案内されたのは最上階にある純和風の部屋だった。真っ先に目に入ったのは十畳もの大部屋で、床の間には掛け軸と生け花が飾られている。奥には六畳の部屋があって、その奥にもまだ何かありそうな雰囲気だ。豪華な部屋に鈴は一人啞然とする。

「すごい、綺麗な、お部屋」

ようやく出た言葉に仲居は微笑みながら、

「ありがとうございます。奥には露天風呂もありますのでどうぞご利用ください」

と、優雅に露天風呂がある方向を示す。

「露天風呂ですか！」

「ええ」

鈴の大声に驚きもせず、仲居は二人くらいなら余裕で入れそうな広さの露天風呂まで案内してくれた。

露天風呂は竹壁に囲まれており、肩ほどの丈があるその囲いの向こうには、山のふもとに広がる街の灯りが見える。空には一等星が輝き始めている。これを眺めながら湯に浸かれれば夢心地だろう。

「お食事はどうされますか？」

「原田さん、風呂と食事、どっちが先がいい？」

賢い仲居は露天風呂に夢中になっている鈴ではなく後ろから見守っていた本村に尋ねた。彼は同じ内容を鈴に尋ねてくる。

風呂に入っているところを想像するだけで夢見心地になっていた鈴は慌てて振り返り、「あ、どうしましょうか。えっと、……まずはお風呂で！」と返事をした。

「わかった。じゃあ一時間半くらいしたら食事にしてもらえます？」

「はい。それではどうぞゆっくり」

深々と礼をした仲居は足音も立てず部屋を出ていった。鈴は露天風呂から離れて部屋

に戻ると改めて室内を見渡す。

鈴が今まで泊まったことがあるホテルは、狭い部屋にベッドだけが置いてあるようなビジネスホテルばかりだった。友人と出かけるときに、少し値が張るホテルに泊まったことがあるくらいで、こんなにゆったりした部屋を取ったことは一度もない。それこそ、修学旅行でみんなと一緒に泊まった大部屋くらいじゃないだろうか。

「どう？」

落ちつきのない鈴とは対照的に、本村はいつの間にか座布団に腰を落ち着けていた。鈴もその向かい側の座布団にすんと腰を下ろす。

「すごく素敵です！ でも本村さん、どうしたんですか、急に。今日ホテルに泊まるなんて言ってませんでしたよね。それに、ここってかなり高いんじゃない？」

「たまにはいいかなと思つて。それより風呂に行こうか。大浴場もあるらしいから」

「大浴場ですか！ すごい！」

本村の話題転換にまんまと乗せられ鈴は歓声を上げた。何を聞いても驚く鈴を見て本村が笑しげに笑っている。

「今日はだいたい歩いたし、ゆっくり浸かったらいいよ。とはいっても食事が来るからあまりゆっくりもできないけど」

「そうですね！ ……あ、でも本村さん、私、まずは部屋の露天風呂に入ってみたいです」

食事が運ばれてくるのだから、わざわざ大浴場に足を運ぶより部屋の風呂に入った方がゆつくりできる。しかし鈴の言葉に本村が珍しく、
 「露天風呂はあの方がいいんじゃないかな？　今は大浴場にしようよ」
 と、止めに入った。本村がそう言うのなら大浴場でも構わないのだが普段見ない反応に鈴は首を傾げる。

「どうしてですか？」

「大浴場はあとじゃ入れなくなるだろう？」

「遅い時間は閉まってるんですか？」

「いや、そうじゃなくて……」

聞き返すと本村が言葉を濁す。よっぽどの理由があるのだろうか。

「ほら、あれだよ」

「あれ？」

「あれ」

「あれ？」

鈴は一向に理解できない。

本村は視線を彷徨さまよわせて額を押さえたあと、

「痕あがついたら入りにくいんじゃない？」

とボソボソ呟く。

「あと？」

「……だからほら……キスマーク」

ちよつと考えればわかりそうなものなのに気付かないのだから嫌になる。自分たちはここまで来て何もせずに帰るようなお付き合いではなかった。

「……そ、そーですね、先に大浴場がいいや！　あ、本村さん、浴衣がありますよ、浴衣！　お風呂上がりに着ましよう！」

本村の照れが移って鈴は慌てて立ち上がり誤魔化そうとする。本村も恥ずかしかったのだろう、視線が泳いでいた。

抱き合う最中、恥ずかしい言葉を囁ささいたりする本村だが、普段は清潔感がある男。鈍い鈴に合わせてストレートに言葉を投げかけてくれるが、本来この手の話題は苦手なだろう。鈴はアクセサリーを外すと浴衣に着替え、部屋に用意されていたバスタオルを胸に抱いて、本村と一緒に部屋を出た。

「そういえば……今何時くらいなんですか？」

「えっと、確か五時半過ぎかな。七時に夕食ならちようどいいかもね。ここの食事美味しいよ」

「本村さん、ここに来たことがあるんですか？」

本村は少し照れたように笑った。

「……いや。鎌倉付近にいいホテルがないかと思って調べた。一人で泊まるならこんないい宿は取らないよ」

そういうえば旅行中に車で寝泊まりすることもあるという本村だ。宿に拘とどまる人間ではないのだろう。

「……調べたというか、実は佐藤さんに聞いたんだけどね。『鎌倉で、どこかいい宿ないですか?』って。そうしたら、色々考えてくれたみたいで」

「あの佐藤係長がですか」

人事部の麗人と呼ばれ社内でも人気が高い佐藤。遠い世界の人のように思っていたが、本村と付き合うようになって名前を聞く機会が増えた。

「うん。いくつかピックアップしてくれたんだけど、その中でもここがいいだろうってさ。あの人も来たことがあるそうだよ」

だから安心だと笑みを浮かべる本村から、佐藤に対する信頼が見える。

「わざわざ調べてくださるなんて、親切なんですね」

しかし、鈴の言葉に、本村の表情が曇った。

「親切……? これ頼んでたせいで足元見られて仕事で口出しできなくなっちゃったから何とも言いがたいけど……」

「?」

「あ、ごめん、こつちの話。そうだね、うん、まあ、親切なんじゃないかな」

本村は話を濁すように苦笑した。

「本村さんは佐藤係長と仲がいいんですか?」

「仲がいいというか……彼の方が年下だけどいつもお世話になってるよ。仕事帰りに高木さんの居酒屋で一緒に飲むことも多いし、お互いの家で飲むこともあるな」

ようやく到着したエレベーターに乗り込みながら本村が説明してくれる。

高木の居酒屋とは、本村と佐藤の大学時代の先輩が経営している店だ。鈴も一度だけ足を運んだことがある。しかし、二人が互いの家に行き来しているのは知らなかった。

「そうなんですか! 佐藤係長ってものすごく人気があるんですよ。それ聞いたら女性社員が羨うらやましがりそう」

「あー……あの綺麗な顔立ちしてるからね。たまに仲を取り持ってくれて相談来るなあ。気になるなら自分で行けばいいのにね……」

これは相当苦労しているに違いないと思っているうちにエレベーターのドアが開いた。一階に着いたようだ。鈴はエレベーターから降りようとすする。

「……原田さんもそういう人が好み?」

そこで聞こえた咳き。鈴は本村を振り返る。彼は返事を待つようにじつとこちらを見

ていた。鈴は佐藤の姿を思い浮かべる。

「……歩く姿が綺麗ですよ」

「歩く姿？」

「じゃん、じゃん、と歩いている姿が綺麗だなあと思ったことがあります。……あ」

話しているうちにエレベーターのドアが閉まった。鈴は「まあ、いいか」と本村に視線を戻す。

「みんなは出世が早いとか、紳士的だとか、色っぽくて綺麗だから部屋に置いて鑑賞したいとか好き勝手言ってますけど」

「そんなこと言われているのか、あの人」

「はい。でも、好みで言うならピツタリ当てはまるのは本村さんですから、私」

「え、俺？」

驚く本村の前で、鈴は右手を持ち上げて指を折りながら言う。

「優しくて、大人で、知的で、包容力があって……私の好みはそういう人なんです。だから私が好きなのは本村さんですし、私の理想も本村さんなんですよ」

次に、鈴の直属の上司であり、幼なじみでもある城崎しろさきの姿を思い浮かべた。

「それに、私、城崎さんのご家族とも仲がいいんですけど、あそこ美形一家なんですよね。ご両親はいつまでも若いし、城崎さんの妹さんが宝塚系というか中性的で、それこ

そ佐藤係長みたいな感じなんですよ。それを子供の頃から見ていますからね、美形は見慣れました」

あはは、と笑って鈴は『開』のボタンを押そうとする。その体を背後から本村が急に抱きしめてきた。

「本村さん？」

どうしたのだろうと体を拘束する腕にそっと触れる。彼は鈴の肩に顔を埋め、

「……部屋に連れ帰りたい」

そう、熱を含んだ声色オノノクで囁いた。本村が望むのであればこのまま部屋に戻って抱き合ってもいい。だけど、彼は、それをしないだろう。彼は自分自身ではなく鈴にとって一番いいであろう選択肢を選んでいく。

「でもそれじゃホントにラブホと変わらなくなるな」

案の定、本村が鈴を解放しエレベーターのドアを開いた。

大好きな本村。我慢はして欲しくないのだが、理性を失った自分を恥じて自己嫌悪に陥るおちのも知っている。こういうときになんと言えばお互いにとっての正解になるのだろうか。

「佐藤さんはね、無茶苦茶な人だよ」

「無茶苦茶？」

話を戻すようにして出てきた佐藤の名前。鈴も何事もなかったかのようにその話題に乗る。

「色んな経験をしたがる人で、常識を踏まえた上であえて無茶をするんだ。あと一つでも元氣だね。落ち込んでいる姿を見たことがない。強いよ、彼は。怖いくらいだ」

「それはまた見た目とギャップが激しいですね」
鈴の言葉に本村は頷く。

「少なくとも女性社員が考えているような人ではないと思うよ。あの人と付き合ったら、散々振り回されるだろうな。どんな環境下にあっても自由気ままな人だからね」

人間深く付き合ってみないと本質はわからないものだと考えていると本村が目を伏せる。

「彼のおかげで今の自分があるし、すごく感謝しているよ」

溜息を零すように彼の口から落ちた言葉に鈴は内心驚いた。

本村は誰とでも親しく社交的に見えて、その実、人付き合いがとことん嫌いなタイプだ。他人に興味を持たず、自分の価値観と世界で生きている。

そんな本村にここまで言わせる佐藤大輔とは一体何者なのだろう。

もつと佐藤の話を聞いてみたくなったが、エレベーターでの抱擁ほうようを思い出してやめた。彼は本来嫉妬深かったはずだ。鈴が佐藤に興味を持ち、根掘り葉掘り話を聞いてしまう

と知らぬところで不安にさせるかもしれない。

今後、他の男性に興味を示す素振りはやめようと心に誓い、「じゃあまたあとでね」と男湯に入っていく本村を見送った。

鈴は温泉に浸かりながら、本村の言葉を思い出す。

『彼のおかげで今の自分があるし、すごく感謝しているよ』

その言葉を「怖い」と感じてしまうのは、本村にとって佐藤がどんな存在なのかハッキリわからないせいだろうか。

自分と佐藤、どちらの方が本村にとって大事な存在なのだろうかと馬鹿な疑問が浮かんで消えた。

5

入浴を終え部屋に戻ると、所狭しと豪華な夕食が並んでいた。どれもこれも美味しく舌鼓たとつづを打つ。

「しばらく動けそうにないです」

全て綺麗に平らげ、お茶を飲みながら一息ついた鈴は自分の腹を押さえた。そんな鈴

を見て、テーブルの向こう側に座っていた本村が表情を和らげる。そして、立ち上がったかと思うと、鈴の隣に腰かけ、そっと手を重ねてきた。

「今日でやっと半年だね」

彼の言葉に鈴は元から大きな目をさらに大きく見開く。半年。そう、今日で半年目。しかしそれは自分だけの記念日だったのに。驚きに目を見張る鈴に彼は「勿論」と返事をする。

「もしかして、今日ホテル取ってくれたのも……」

「ああ、最近原田さんには差し入れしてもらって世話され通しだったからお礼がしたくて。前もって話すと気を使うだろうから黙っていたんだ。あと、それとなく邪魔してゴメン」

「邪魔？」

何のことを言っているのかわからなくて尋ね返す。

「原田さんのことだから一人でまた何か準備しようとするんじゃないかと思って、できないように邪魔してたんだ」

彼の言うとおり、本来は今日、豪華な夕食を作る予定だった。しかし予定が合わず、弁当に変更したわけだが。

「何か用意するつもりだった？」

「はい。でもできなくて……あの、それでお弁当」

「ああ、やっぱり。良かった」

どうやら全て本村の思惑どおりだったらしい。自分の知らないところが運ばれているなんて、夢にも思わなかった。

「でも何で『今日が半年目だ』って言ってこなかったんだい？　まるで秘密にしているうだったけど……」

「え、それは……」

本村の疑問に鈴は観念して全部話した。彼は「原田さんらしいけど……」と呟きつつも不満顔だ。本村の手がするりと鈴の腰に回り、そのまま引き寄せられる。

「こういう物は共有しようよ。万が一俺が忘れてても、それは言っていて欲しいな」
「だって半年くらいで浮かれてたら呆れられちゃうんじゃないかと思って……」

「でも実際に俺はきちんと覚えていたわけだし、お祝いする気もあつたんだよ？」

本村は顔を寄せて、鈴の額に口づける。

「そうやって一人で済ませずに確認して欲しいな。知らないところで色々終わってたら俺も嫌なんだ。ね？」

お願いするように言われるとどうにも弱い鈴は「頑張ります」と返して本村の首に腕

を絡めた。

「……覚えてくれてたんですね」

自分だけのお祝いだったのに、彼もちゃんと覚えていてこんなに素敵な贈り物を用意してくれていたなんて。

「これからも仲良くしてくださいね、本村さん」

願かけするように照れ混じりで囁けば、本村が抱きしめてくれる。

「それは俺のセリフだよ……」

溶けそうなほどに甘い声と一緒に。

「……浴衣っていいね……こういうの好きなのかも……」

そう、本村が呟いたのは、鈴の浴衣が中途半端に脱がされたときだった。帯は締めたままで、袴が大きく開かれ下着が覗いている。

浴衣から伸びる足を本村に撫でられ、鈴の体が小さく震えた。

「本村さん」

「ん……？」

「我慢しないでいいですからね」

彼の手が鈴のブラジャーを持ち上げて柔らかな双丘を弄ぶ最中、鈴は言った。

「今日は滅茶苦茶にいいですよ？」

普段はそれこそ穏やかだし鈴に気を回してくれる本村だが、セックスの最中は信じられないほど鈴に執着を見せる時がある。鈴が思うに、それが本村の本質なのだろう。

ただ、そんな本村の熱情を受け止めてしまうと翌日鈴の体に響く。そのため、彼は自分をセーブしているようだ。

確かに頻繁にやられるとなると鈴も体を鍛えに行かなければならないが、鈴本人としては本村にあまり我慢して欲しくない。それにあの激しい熱を知ってしまったら常にその熱が欲しくて仕方なくて。

「……出先だよ？」

「大丈夫ですよ、多分」

「いや、大丈夫じゃないと思うよ、多分。今日は危ない。だからあまり煽っちゃダメ」

「記念日じゃないですか」

「それが余計に危ないんだ」

本村が鈴の胸の先端を口に含む。

「んあ……っ」

「だからいい子にしておいで」

鈴から言葉を奪うように本村が愛撫に没頭していく。何か言おうとすればすぐに本村